

全盲になって約30年が経ち、何も見えていないはずの毎日だが、まれに見えているように感じるときがある。現実には、嫁や子たちの顔を見ることはできない。家族には寂しい思いをさせていると思うが、私個人的には毎日の生活を決して気がかりだとは思っていない。

ありがちな表現だが、見えない私なりに見えているものがあるのだろうか。そんな今の生き方に手ごたえを感じるような生き方を常にしてきたつもりだ。

決して塞ぎ込んだ時期がなかったわけではない。何よりも私を明るく産み育ててくれた両親に、そして私に生きる力をくれた今は良き相棒の「音楽」と出会えたことに心から感謝したい。

目が見えないという障がいには困難がつきものだが、この年齢までやってこられたことを思うと何にでも取り組みそうな気もする。

ただし、要領よくはできない。手先や聴力が目の代わりになってフルに働いてくれている。動けば動くほど、危険や怪我にもさらされる。しかし、私はじっとしてられない性分だ。

いつも心がけてきたこと、それは「気負いなく生きる」ということだ。他人には無駄でも、私には肥やしになる。遠回りがどうした。時間がかかれば、これこそ「継続は力なり！」と意味は違うが粘り強くやってきた。

所詮、人は一人ひとり違う。障がいは、まず気がかりなものに取られてしまう。障がいを個性と言うのもいいだろう。

大切なのは、一人ひとりがどう生きられるかということだ。人は生きるための力を備えるべく、誰もが前へ進むことを生まれたときから始めているように思う。人は、一人ひとりが社会を作るエネルギーそのものなのだ。

一演奏家として、障がいのある方への音楽の先生として、夫として、3児の父として、そして一人の障がい者として、自分では至って平凡な存在だと思っている。だが、この本の中で触れたことが誰かの参考になれば幸いだ。文章を書くことを最も苦手とする私としては、報われた気持ちになるだろう。